

賑わう歓楽街、国分町

～復興の街の「オアシス」～

日本不動産研究所 東北支社
不動産鑑定士 齋藤 明

【東北地方随一の歓楽街国分町】

国分町は、東北地方を代表する宮城県仙台市に存する歓楽街である。

東北新幹線の「仙台」駅からは北西方向に徒歩で約20分、仙台市営地下鉄「勾当台公園」駅又は「広瀬通」駅からは、歩いて5分足らずで国分町の中心部に至れる。東北地方随一の歓楽街国分町は、夏には七夕祭りが飾られる商業集積地「一番町商店街」の西側背後、冬には光のページェントが煌めく「定禅寺通り」の南側で、東西約250m、南北約900m、面積にしておよそ0.23k㎡といわれており、東京ドームのおよそ半分に相当する大きさである。1970年代からオフィス街であった地区が飲食店ビル街に変更となった歴史がある。その後、飲食街としてバブル経済の時期を含めて隆盛を極め、平成21(’09)年には店舗数2350店余り、中央部の通り沿いで7000人の通行量(国分町街づくりプロジェクト調べ)まで成長したものの、リーマンショック平成20(’08)年を過ぎ、全国的な飲食業の不況のなか、秋田の「川反」、盛岡の「大通・菜園」、山形の「七日町」、青森の「本町」といった東北の地方都市の飲食街ほどではないにしろ、陰りが顕著になりつつあった。



「東北随一の歓楽街・国分町のゲート」



「人と車が行き交う夜の国分町」

【東北大震災の発生】

昨年3月11日に発生した東日本大震災によって、津波の影響こそなかったものの、建物に大きな被害を受けたものもあり、それに加えて食材及び燃料の供給不足の影響から、店舗の再開がなかなかできない店があった。また、被災地復旧の応援に東京をはじめ全国から来られた方々も自粛ムードで、寂寥感が漂っていた記憶がある。そのなかで、飲食店舗が再開されていく様子が日々高まりつつあり、さらに自粛ムードが解け、被災地仙台に復興の意味から客の戻りと共に、国分町にも賑わいが回復されつつあった。

【復興バブル】

被災地復興のための応援の方を中心に、活気が戻った国分町は、マスコミに取り上げられ「空前の消費爆発」とまでいわれるほどの好景気と報道されたりもした。昨年の12月前後のことである。中心となっていたのは、主に若者向けの俗に言う「大型箱物飲食施設」である。

【新しい飲食ビルの建設】

国分町のほぼ中心部に近い二丁目の角地に、敷地面積 1372 m²、延べ 5,258 m²、5階建店舗付駐車場「PSCビル（パーキングスクエアチマツシマビル）」の営業が4月23日に開始される。国分町に誕生する新しいビルが、国分町地域の代表的な一角を占めるということで話題を呼んでいる。注目されるべき1階の店舗部分は全て契約済みといわれており、仙台市の客足が仙台駅前方面に向かいつつある傾向をくい止め、国分町のこれからを占う起爆剤として、大いに期待されている。



「国分町の中心部近くに完成した店舗付き駐車場ビル（開業前）。国分町復活の起爆剤としての期待も。」

【復活への期待】

昨年末にマスコミに取り上げられた復興バブルという文言に反応し、被災地で復興支援で働く者のいわば、オアシスの役割を果たしてきた、国分町を含めた仙台市の飲食街に、自粛の声が再び一部聞こえている。4月は入学式、入社式という、若者が集う時期であるが、従来のサラリーマンの心のオアシスとして機能してきた「国分町」に、東北を代表する飲食店の賑わいの復活像を期待したい。